様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24　年　5 月　10 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2009～2011
課題番号：２１５２０００３
研究課題名（和文）　ドイツ観念論における神概念の展相と主観性概念の現代的意義の研究

研究課題名（英文）　A Study on Aspects ofIdea of God and Modern Significances of Ideas ofSubjectivity in German Idealism

研究代表者
座小田　豊　　（　ZAKOTA YUTAKA　）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１２５５７９

研究成果の概要（和文）：神を至高のもの、「永遠の現在」として意識し、同時にその神をなお認識しえていないものとして捉ええたとき、意識それ自身が「人間理性」として生まれ、そこに自らの「理性」への、そして「神」への新たな哲学の問いが始まる。それは何よりも近代以降理性が、己れ自身に対する懐疑を決定的に必須のものと理解するからである。ここに「神」の問題が人間の主観性及び自由の問題と密接に連関していることが明瞭になる。神の理性的理解の可能性への問いが、人間理性の自由の可能性と結びつき、その可能性を開くのである。本研究はこうした連関をドイツ観念論における「良心」概念の分析と解釈を通して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We usually understand God as the supreme, e.g.”nunc aeternitatis”, and at the same time we could realize the God as the unrecognizable. And then we will notice that our own conciousness itself could be human reason.That is because, since modern ages, we think and understand doubt (skepsis) on our own reason as the most important and crucial.It becomes explicit, therefore, that the problems of God has a close relationship with matters of human subjectivity and freedom. I’m certain that the question on possibilities to develop a reasonable understanding on God is relevant to the question on possibilities of human reason, and consequently will open its new possibilities. This study has illuminated these conditions through analysis and interpretation of “ the concept of conscience “ (Gewissensbegriff) in German Idealism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：哲学原論、各論

１．研究開始当初の背景

(1)本研究者はこれまで、ヘーゲル哲学を研究の中心に据えつつ、ドイツ観念論を主な研究対象としてきた。近年は特にフィヒテ哲学を集中的

に探究しているが、その中心となる論点を端的に言うならば、フィヒテの1806年の宗教論『浄福なる生活への導き』に見られる、「思考の最高の高揚に際してのみ神性は立ち現れる」という文章の意味を理解するところにあった。生涯にわたって自我の絶対的自発性の根拠を尋ね続けたフィヒテが、なぜ「思考」の根底に「神性」を認めなくてはならなかったのか、その必然性を解き明かそうとしたのである。フィヒテは自らの哲学的思索の出発点でカント哲学を受容し、理論哲学と実践哲学とを「人間の自由」の理念に基づいて統一する知識学を構想する。フィヒテにとっての自由とは人間主観の根源的自発性、すなわち意識の「発生的 genetisch」な事態にほかならない。絶対的自我のこの知識学と宗教論とのギャップを、通常のフィヒテ研究は、知識学から世俗哲学への転換もしくは転身として捉えてきた。だが、大全集版での講義録刊行を契機として、フィヒテの思索の跡を丹念に辿ることを通して、最晩年に至るまでフィヒテが知識学を講義し続けたこと、しかもそこに理論的進展が認められることが明らかになってきた。すなわち、宗教論のあの表現も、知識学の展開それ自身の中に位置づけて理解されなければならないということが、言いかえれば、フィヒテの知識学の根底に神の思想を読みとるべき必然性が問題となってきたのである。これは、もはや哲学か宗教か、理性か信仰か、そして神か人間かといったヤコービ的な二者択一的観点をもってしては片づけることのできない、哲学における根本的な事態であると言うべきであろう。自我の根底に認められる「神性」を、「神」と言いうるのか否かは、実は、フィヒテのみならず、まさしくドイツ観念論において、さらにはヨーロッパの哲学的伝統全体のなかで問い返されなくてはならない重大な問題なのである。

(2)「神の認識が哲学の第一の課題である」とするヘーゲルもまたこの問題を自らの根本的な問いとして引き受けている。『宗教哲学講義』によれば、その理由は、神が精神であり、しかもすべての精神に現在するものであるがゆえに、人間の精神の営みそのものがすでにして神の認識としてしか成り立ちえない、ということである。この人間と神との、いわば相補的な関係においては、「神の認識」には、いうまでもなく、神による認識という意味も含意されていると見るべきであろう。もちろん、精神としての本質が同じだから、神の精神が現在しているのだからといって、人間精神が神を直ちに認識できるというはずもない。神の側からの働きかけであるならば可能でありうるにしても、思考する哲学の側からすれば、そもそも本質が同じであるというそのことさえ、なお論証を必要とする。哲学の立場からすれば何よりも人間精神は有限であり、限界をもつものだからである。ここでさしあたって言えることは、人間精神が神を真に認識しているのであれば、それは神による認識でもありうるだろうということだけである。とまれ、絶対精神、絶対知というヘーゲル哲学に固有な周知の概念においてもまた、人間精神と神のそれとの根本的な一致が説かれていると見ることができよう。この問題をヨーロッパの哲学的伝統のなかに位置づけて解明することが必須の課題として浮かび上がってきたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)18世紀から19世紀初頭にかけて展開されたドイツ観念論における「主観性」概念の本質を、近代における「神」概念の展開との根本的な相関関係から改めて捉え返し、合わせて、その考察に基づいてドイツ観念論において展開された主観性概念の今日的な意味を明らかにするところにある。すなわち、主観性の一面的な理解に基づいた個人主義を標榜して、目の前にあるものに対する人間の在り方しか認めようとしない現代の人間理解に、神概念をめぐるドイツ観念論の哲学者たちの営みを対置して、ありうるもの、もしくはありうべきものとの関係において捉えられうる人間理解の可能性を改めて問い返すことを目指す。

(2) 問題は何よりもドイツ観念論の哲学者たちのいう「主観性」とは、神との関係において何であったのかを明らかにすることである。フィヒテの自我も、ヘーゲルの精神も、またカントの理性もその根本において神概念との深い結びつきが認められるが、それを解き明かすことで、主観性概念の本質的な姿を浮かび上がらせたいと思う。

(3)この研究を通して、さらには今日の、きわめて個人的で私的であるがゆえに、却って没個性的な人間の有り様に関して、根本的な疑義を提示すると同時に、道徳や自己責任をめぐる現代の諸議論にも有意義な理解の可能性を提起できるであろう。

３．研究の方法

(1)まずは、この問題をめぐるドイツ観念論に属する哲学者たちの相互関係が明らかにされなければならない。フィヒテがそうであったように、いずれにしてもカントが大きな思想的源泉となっていることを明らかにしよう。そのことから、他の思想家たち相互の関係も姿を現わしてくる。もとより、カントその人の思想も他とまったく独立して成立したわけではない。この問題圏に限定して、その影響関係が思想史的に尋ねられてしかるべきであろう。さしあたっては、「主観性」の時代といわれる近代を遡り、クザーヌス、デカルト、スピノザ、そしてライプニッツらの思想が参照されなくてはならない。たとえば、デカルトが言うコギトの「明晰判明性」は明らかに「神の現前」がモデルとなっていると思われるが、その思想的系譜をドイツ観念論の中にまで追っていくことが重要になる。

(2)また、この問題の系譜を遠く哲学の発祥の地、古代ギリシアにまで辿ることが求められる。その上で、「人間精神」と「神の思想」の根源的同一性という思想が哲学の根本的な問題であることを明らかにしよう。

(3)さらには、わが国ではこれまでほとんど取り上げられることがなかったヴォルフの形而上学を詳細に探究し、ライプニッツとカントをつなぐ（あるいは切断する）思想的影響関係を解きほぐす必要がある。以上の歴史的研究を踏まえ、ドイツ観念論における「主観性」概念の相貌を明らかにするとともに、同時にその成果を現代における人間理解に役立てることが目指される。

４．研究成果

(1)まずは、本研究課題に取り組むに当たって、まずはヘーゲル哲学における「神の思想」の根源を明らかにした。すなわち、［雑誌論文］①と②によって、ヘーゲル哲学の根本に神の認識の問題が存在しており、その課題の解決を哲学の問いとしていたことが明らかにした。「神喪失」の苦痛を「自由」誕生の喜びへと転化すること、同時に宗教でありうる哲学を創設すること――イェーナの時代を経た後のヘーゲルにとって、「神の認識」が、精神的主体の知の根拠への問いかけであり、それゆえに、根源的な「自由」の発生の由来を尋ねることでなければならなかったのである。それは、「知の知」を求める哲学にとって「神の認識」はやはり「第一のこと」のはずだからである。

(2)この問題をめぐるドイツ観念論に属する哲学者たちの相互関係を［良心］概念の解明に基づいて明らかにしたのが［図書］の論文①である。主観性の極致ともみなされる「良心」が「神の思想」と根本において通底していることを、カント、フィヒテ、そしてヘーゲルの「良心論」を比較検討することを通して解明した。すなわち、「良心」は主観のものでありながら、その原理的な意義を担うものだということである。「原理的な意義」とはすなわち、「主観」の普遍的な本質を実現するというほどのことである。その意味において「良心」は明らかに「共有知」と見なすことができる。あるいは逆の言い方をするなら、「良心」は私たちがもちうるであろう知のなかで、もっとも共有するに足るものであるがゆえに、かえって共有困難なものだということである。加えて、「良心」は私たちに「負い目」を意識させるものである限りにおいて、私たちの「主観」としての個別性を際立たせる働きをするのである。

(3)さらに、業績〔図書〕の④は、同①の問題意識をヨーロッパの哲学的伝統のなかに位置づけて解明したものである。哲学は古代ギリシアにおいて「神」の認識可能性への問いとして始まったのであるが、これは、たんに哲学の「発祥」の時点の特殊事情なのではないこと、むしろ哲学がその思索を開始するまさにその都度、この問いが発現してくることを、「良心」の問題として解き明かした。すなわち、デカルトの懐疑も、スピノザの確信も共に、人間の主観性と神概念との間の往還の所産であることが、「良心」の意義の解明から捉え返されるのである。このことをとくにフィヒテの言う自我の「発生」という観点に依拠して解明した。たしかに、「良心」は私のものとして予めあるのだとも、神に属するものだとも言い募ることはできよう。しかし、どちらに属するかは、実は問題ではない。己れの不確実性が強く意識され、「負い目」を感じるとき、「良心」は神のがわに立つように思われ、その一方で、己れを確信するとき、己れのがわにあると思われるのであろう。フィヒテの言う「接触点」は両者を貫くこうした「良心」の特質を言い当てている。大切なのは、どちらの「良心」も私のものであり、私にとって不可欠な知の「始まり」をなすということである。それが知の「始まり」であるからこそ、「不確実」を自覚しながらもなお、私は最も普遍的な存在者として他者と交わりつつ、自由でありうるのである。言いかえるなら、「良心」は、人の間において初めて意識されるものであるがゆえに、私において「始まり」、他者と交わる「始まり」となり、そしてあらゆるものと共感する「絆」にもなりうるのである。

(4)この研究課題の今日的意義については、業績〔図書〕④の共編著に発表された私の二つの論考が示していると思う。2011年3月11日に発生した東日本大震災という災害を目の当たりにして、しばし呆然とした時期が続いたが、一研究者が「人間として」なしうることを問い続けた結果がこれである。神概念との直接的な関連に言及はしなかった（できなかった）が、ここで私が主張した「ふるさと」、「聖なるもの」、そして「精神の生活」とは本研究課題の主題である、「神概念」と「主観性」とが相交わる境域にほかならない。この境域において「今を生きよう」と呼びかけたかったのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①座小田豊 「「神を認識する」とはどのようなことか――」、『シェリング年報』（日本シェリング協会）、査読有、第 17 号、2009 年 9 月、26-37
②座小田豊 「ヘーゲル哲学における神の思想」、『フィロソフィア・イワテ』（岩手哲学会）、査読なし、第 42 号、2010 年 11 月、37-50
③座小田豊 「「媒語」としての精神の可能性について――シンポジウム「ヘーゲルにおける哲学知の展開」の総括」、『ヘーゲル哲学研究』（日本ヘーゲル学会）、査読有、第17号、2011 年 12 月、61-65

〔学会発表〕（計２件）
① 座小田豊 「神と人間の同一性と差異について」（東北大学文学研究科公開講座第 8 期有備館講座における講演）、 2009 年 9 月（宮城県大崎市・スコーレハウス）
② 座小田豊 「ヘーゲル哲学における神の思想」（第 42 回岩手哲学会大会における公開講演）、2010 年 7 月、岩手大学にて

〔図書〕（計４件）
①座小田豊 「共有知としての「良心」についての一考察――「良心」は誰のものか？」（栗原隆編『共感と感応』東北大学出版会、2011 年 4 月）77-103 頁
②座小田豊 翻訳（小熊正久・後藤嘉也と共訳）：ハンス・ブルーメンベルク『コペルニクス的宇宙の生成 第3巻』（法政大学出版局）2011 年 10 月全 319 頁
③座小田豊、尾崎彰宏と共編著『今を生きる――東日本大震災から明日へ！ 復興と再生への提言 第１巻 人間として』（東北大学出版会、2012 年 3 月）、そのうち「まえがき―「人間として」問いかけること」（ⅲ―ｘｘⅱ頁）、および「第 9 章「精神の生活」――「喪われた者たち」の「記憶」と「ふるさと」の根源的な力について――」（157-185 頁）を執筆
④座小田豊 「共通知としての「良心」――その始まりと神の問題――」（栗原隆編『世界の感覚と生の気分』ナカニシヤ出版、2012 年３月）66-85 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
座小田 豊（ZAKOTA YUTAKA）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20125579

(2)研究分担者（なし）

(3)連携研究者（なし）